

バングラデシュ海外出稼ぎ者の夢と葛藤

——出稼ぎ先ギリシャと出身農村社会の狭間で——

南 出 和 余

1. は じ め に

バングラデシュ中央北部ジャマルプール県の農村でアルミ製家具大工の見習いとして働くシポンは、2003年に小学校4年生を中退した後、兄を頼ってジャマルプール市内に出てビスケット工場や小売店などいくつかの仕事を経験してきた。現在の大工の仕事には約2年前から従事している。これまでの仕事のなかではもっとも長く続いている。しかし彼が目指すのは海外への出稼ぎだという。「海外に出ないと家族が養えない。海外で働いて貯めた資金で村で何かビジネスを始める。それがもっとも手っ取り早い成功法だ」という。

2015年2月10日のバングラデシュ国内英字新聞の一面に、「サウジアラビア政府は昨年130万人の外国人労働者を受け入れ、今年もさらに同数の労働者需要を予定しており、バングラデシュからも毎月1万人の新たな労働者を受け入れる」との記事が掲載された [The Daily Star 2015]。記事に寄れば、現在サウジアラビアで働くバングラデシュ人労働者は150万人を超えている。新たな需要とされている労働者は運転手や家事労働者で、その給与は月およそ26,000から31,000BDT¹⁾、航空券や査証取得など渡航に掛かる費用はすべて雇用者側が持つことになっている。バングラデシュから海外への出稼ぎ者の歴史は長いが、とくに2006年から中東諸国を中心に出国に出る者が急激に増え、2008年のピーク時には総勢87万人を超えた。

この海外出稼ぎ者による送金は、バングラデシュ国家経済に多大な影響をもたらしている。海外出稼ぎ者による2010年の総送金額は110億ドルに達し [BBS 2011]、この額は同年のバングラデシュGDPの約11%を占める。21世紀以降のバングラデシュの著しい経済成長において、海外への出稼ぎは、首都ダッカに急増する衣料品製造業と合わせて主要なファクターとなっている。その両者に共通するのは、労働者の多くが農村出身者であるということである。多くの若者たちが農村から都市に働きに出て、さらには冒頭のシポンのように、海外への出稼ぎを目指す。

これだけ出稼ぎが広く普及するなかで、出稼ぎという行為はどのように実践されているのか。もちろん人びとを出稼ぎに誘うのは経済的理由であり、国家経済においても家族戦略に

1) バングラデシュ通貨タカの略。2017年3月現在のレートで1BDT=約1.5円。

キーワード：バングラデシュ、ギリシャ、海外出稼ぎ

においても、経済的に大きなインパクトをもたらしていることはいうまでもない。そのなかで本稿は、海外出稼ぎという行為が、出稼ぎ者を送り出すバングラデシュ農村社会と、出稼ぎ先での出稼ぎ当事者の双方において、どのように認識されているのかを問う。そのことで、マクロな経済成長下でおこる農村社会のミクロな動態の一端を、経済的インパクトだけでなく社会的側面から明らかにする。なお、一概に海外出稼ぎと言っても、その渡航先や渡航年齢によって状況が異なる。詳細は後述するが、本稿では、ギリシャに働きに出た比較的若年層の未婚男性たちを事例とし、「ヨーロッパへの出稼ぎ」と「若年層」であることの特異性についても検討する。

2. バングラデシュ海外出稼ぎの動向

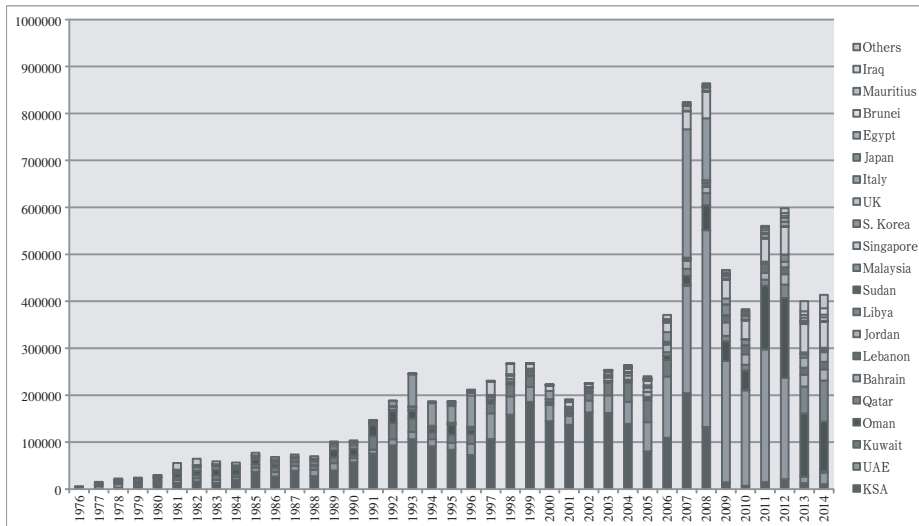
バングラデシュからの海外出稼ぎに関しては、[三宅 1993]をはじめ日本でも断片的に研究が重ねられ、近年では、送り出す側のバングラデシュおよび受け入れる側のイギリスやマレーシア社会などでも多くの研究が見られる [Abrar and Seeley eds. 2009, Gardner 2008, Zamir 2006 など]。これら先行研究を参考に、バングラデシュからの海外出稼ぎ事情について概観しておきたい。

三宅 [1993: 109] によれば、1971年バングラデシュ独立以前の東パキスタン時代を含めれば、バングラデシュ地域からの国外労働移動は1947年の分離独立直後のイギリスへの出稼ぎから始まる。中東地域への出稼ぎは少し後の1960年代前半からで、「主にチッタゴン地方から少数の者がサウジアラビアやカタールに出かけた」[前掲: 110]。しかしそれらは政府が直接関与した出稼ぎではなく「イスラム教の巡礼の名目で入国」していたとされる [前掲: 111]。バングラデシュ政府が国家政策として海外への出稼ぎを位置づけたのは独立後1976年からであるが、当時は仲介者の不正行為等が後を絶たず、海外出稼ぎには大きなリスクをともなった [前掲: 112]。海外出稼ぎのチャネルについては三宅 [1993] に詳しく紹介されているが、もっとも多いのは先に出稼ぎに出ている親戚知人や友人の紹介による個人的ネットワークに頼るケースであった [前掲: 120]。また海外への出稼ぎ者を輩出する地域には偏りがあり、港町のチッタゴンやノアカリ県、イギリスの植民地支配（ティープランテーション等）との関係から北部シレット県の出身者が先駆的に海外に働きに出た [池田 1993: 167]。人口密度の高い地域からの出稼ぎ者が多く、その意味において、ダッカやコミラ県も古くから多くの出稼ぎ者を輩出している [前掲: 169]。

バングラデシュ政府 (Bureau of Manpower, Employment and Training: BMET, 以下 BMET) の統計によれば、海外への出稼ぎは中東諸国を中心に1990年代からうなぎ上りに増加し、とくに2000年代半ば以降の増加が著しい (図1 参照)。2000年代以降の伸びのなかにはイギリスやイタリア、日本といった非イスラーム国が含まれているのが特徴的であるが、これは合法的な出稼ぎおよび統計上の把握が進んだだけであって、実際には、例えば日本では非法の出稼ぎはむしろ1980年代がピークであったことが個別の報告から明らかである [高田 2010,

山本ほか 2009 など]。また、山本 [前掲：88] の報告では、例えばサウジアラビアへの出稼ぎ者保有世帯より日本への出稼ぎ者保有世帯のほうが社会階層が高いというように、出稼ぎ先による階層差も確認されている。

図 1：バングラデシュからの海外出稼ぎ者数の出稼ぎ先別推移



出典：BMET (<http://www.bmet.gov.bd/BMET/viewStatReport.action?reportnumber=20>)
から筆者作成

本稿冒頭で紹介したように、中東諸国への出稼ぎには政府間協定に基づく送り出し政策が布かれており、BMET では出稼ぎに準じたさまざまなトレーニングプログラムも提供している。筆者の調査の限りでは、中東諸国への出稼ぎ者たちは 2 年ないし 3 年に 1 度、2、3 か月の休暇をもらって帰省し、再び同じところに出かける。2 年毎の休暇では一時帰国の費用も雇用者が出してくれるケースが多い。

これに対してヨーロッパ諸国や日本への出稼ぎは、統計上に示される合法的な出稼ぎは全体のほんの一部で、数値に表れない非合法の出稼ぎ者が大半である。彼らは受入先での滞在許可を得るのに何年もの歳月を費やすことも少なくなく、査証が取得できればようやく往来が可能となる。あるいは査証を得られないまま 1 回きりの出稼ぎとなる。非合法の渡航には道中多くのリスクもともなう。貨物船に乗り込んで移動したものの途中で船が座礁したり、陸路で歩いて国境を超える際に警備隊に捕まるといったニュースが度々新聞で報道され、そうしたリスクから出稼ぎの悲劇がさまざまに語られる。それでも中東諸国よりヨーロッパ諸国への出稼ぎのほうが好まれる。その理由は賃金の差とヨーロッパへのあこがれにある。本稿では、こうした「出稼ぎ文化」、すなわち、海外への出稼ぎが現在のバングラデシュの人びとにどのように認識されているのか、その認識と現実とのギャップがどのように処理されているのかを、明らかにする。

3. 調査の概要

本稿で扱うデータの舞台となるのは、バングラデシュ中央北部に位置するジャマルプール県中央郡の農村部と、同村出身者をはじめとする若者たちが働くギリシャアテネである。出稼ぎ者を送り出す当該農村では、近年、多くの男性がとくに中東方面に出稼ぎに出るようになった。その多くは家族をもつ既婚男性である。たとえば2015年の筆者の調査では、人口400人規模のM村N集落から18人の男性が中東諸国へと出稼ぎに出ている。早い者は1990年代前半から出ていたが、多くは2000年前後からであった。

前節で述べた先行研究では、従来から海外へ多くの出稼ぎ者を輩出している地域は、ダッカやチッタゴンといった都市部、コミラ県やノアカリ県といった氾濫原農村やシレット県などであった〔池田 1993：164〕ことからすると、本稿の調査地ジャマルプール県における海外出稼ぎの増加は近年に見られる傾向である。ジャマルプール県は、東部ジョムナ川流域を除くとバングラデシュのなかでは比較的海抜が高いため洪水の心配が少なく、年間を通じて稲作農業が可能な地域である。そのためバングラデシュの氾濫原に多くみられるような季節労働移動の必要性は低く、日雇いを含めた農業従事者の割合は従来から高かった。むしろ農繁期にはバングラデシュ北部からの季節農業者を受け入れてきた地域である。しかし、近年では農村部にも商品経済が浸透し、現金収入の必要性から都市や海外への出稼ぎ者が急増している。BMETの統計によると、2014年のジャマルプール県からの海外出稼ぎ者数は4,296人、2005年から2014年までの総数は41,765人で²⁾、この数はバングラデシュ海外出稼ぎ者総数の0.82%に過ぎない。とはいえ、もっとも多くの出稼ぎ者を輩出しているコミラ県でも全体の11.06%で、現在では全土において海外出稼ぎが浸透している³⁾。1990年代の出稼ぎには個人のネットワークに頼る出稼ぎが大半であったため〔三宅 1993〕出身地の偏りが色濃くみられたが、現在は、とくに中東諸国への出稼ぎには政府の斡旋や仲介業者がチャネルとして機能しているため、個人ネットワークに乏しかった地域からでも出稼ぎのルートが確保されつつあることを意味している。

海外への出稼ぎ者をもつ家庭では、海外送金によって経済的急成長を見せる。そうした家庭では、仕送りですまらずに出稼ぎに掛かった費用の借金を返し、次に家屋をレンガ造りにする。家屋の建て替えによって経済成長は象徴的に可視化され、他の村人たちを同様に動機付けている。家屋の建て替えの次に投資するのは、子どもの教育と、土地への投資である。筆者は当該地域で2000年から定期的に人類学調査を実施してきたが、その主要テーマは1990年前後からの農村部における初等教育の浸透と、学校に通い出した「教育第一世代」⁴⁾の子どもたちの生活実態から見る社会変容である。1990年頃から見られた急激な初等教育普及のなかで、

2) <http://www.bmet.gov.bd/BMET/viewStatReport.action?reportnumber=28>

3) <http://www.bmet.gov.bd/BMET/viewStatReport.action?reportnumber=33>

4) 筆者がいうところの「教育第一世代」とは、親世代にほとんど通学経験がないなかで小学校に通い出した、当該地域では主に1980年後半以降生まれを中心とする世代である。

政府運営の公立学校だけでなく、NGO 運営のノンフォーマル学校やマドラサ、そして私立学校が同時並行的に普及する状況がみられた。学校選択については別稿ですでに述べたが [Minamide 2004]、そのなかで私立学校を選択する親には出稼ぎ者も多く含まれる。最近では私立学校の数にはさらに増加している。出稼ぎ者自身の学歴にはそれほど有意な差は見られず、とくに中東諸国への出稼ぎ者には通学経験がほとんどない者も含まれる。しかし、次世代の子どもたちには教育を受けさせることを重視し、子どもの教育が現金収入の需要を生みだし、出稼ぎに駆り立てることも少なくない。

さらに、著しいインフレのなか、出稼ぎによる仕送りを担保する方法として土地の購入が盛んに行われている。当該地域からの出稼ぎは、海外の場合も都市の場合もほとんどが男性なので、農業の中心的担い手を失った家庭では、土地を購入しても小作に出すのが大半であるが、財として土地を蓄える。そのため当該地域の土地価格は年々倍増の勢いで急騰している。農業人口が減っているにも関わらず、である。

本稿が事例とするのは、このジャマルプール県の農村からギリシャアテネに出稼ぎに出た若者である。筆者が2000年から同地域でフィールドワークを実施するにあたってホームステイしていた家族のなかに、ギリシャアテネへの出稼ぎ者がいたのがきっかけである。1990年初頭にバングラデシュを出た兄B氏（長子）と、2005年に兄を頼ってギリシャに渡った弟S氏（三男・五子）である。彼らがどのような状況下で出稼ぎに至ったのか、また出稼ぎ者と家族が日頃どのように連絡を取り合い、送り出した家族は出稼ぎ者に対してどのような期待をもっているのか、そして出稼ぎ者をもつ家が当該社会のなかでどのように見られているのかは、長期フィールドワークのなかで捉えてきた。

そして、B氏とS氏を頼りに2011年8月にアテネを訪れ、アテネのバングラデシュ移民コミュニティでの聞き取り調査を行った⁵⁾。B氏とS氏からの紹介を頼りに計13人のバングラデシュ出身者に、移動の経緯や現在までに従事した職業、出身地と家族、アテネでの生活状況、将来の展望について非定型インタビューを行った（表1参照）。許可が得られた場合にはビデオによる撮影も実施した。インタビューに関してはほとんどの対象者が撮影に応じてくれた。仕事先での様子も撮影を依頼したところ、バングラデシュ人が経営する縫製工場や店では問題なく撮影に応じてくれたが、ギリシャ人が経営するレストラン等では雇用主の許可が得られなかったため撮影を断念した。また、路上で物売りをしているバングラデシュ出身者にも、その場で調査撮影を依頼し、応じてもらった。南アジア移民らしき人に筆者がベンガル語で話しかけると大半の場合は快く応じてくれた。

撮影した映像は編集したうえでバングラデシュに持参し、彼らの家族に見せることで、出稼ぎ当事者と送り出し家族双方の理解を捉えることも試みた。映像は家族の反応も含めて再度編集し、『シムルの夢と葛藤—A Life Suspended—』として作品化し、国内外の学会や映

5) 2014年11月にも再度アテネに渡航する機会を得たので、2011年の追跡調査を行った。

表1：アテネ調査対象一覧（すべて男性）

区分	氏名	現職	住居	出身	経緯	渡航時期	滞在許可	アテネ以前	帰国
第 一 期	ZA	スーパーマーケット、 食料品店2店、 旅行会社経営	家族(妻・2児)		ロシア留学時にギリ シヤ人と結婚	1990～	1990婚姻ビザ	ロシア留学、エンジニア として各国で仕事	年に1度は帰省
	MSD	縫製業・物売り	共同生活	マザリプール		1989～	2001グリーンカード		グリーンカード取得以後7回 帰省、2002年にバンガラで結婚、 6歳の男児
	B	縫製工場経営→帰国	家族(妻・2児)	ジャマルプール	B	1992～2011	1998グリーンカード	パキスタン→ヨルダン→ トルコ→ギリシヤ	2000年から随時、2003年に妻 を呼び寄せて2児(娘・息子)、 2011年に帰国
	M	食料品店2店経営、 縫製工場経営	家族(妻・2児)			1994～	1998グリーンカード		帰国を考えている
	A	縫製工場経営				1996～	1998グリーンカード		
	R	縫製工場経営	家族(妻・2児)	ジョソール		1997～	1998グリーンカード	パキスタンで3年縫製工 場	2006年に結婚して妻を呼び寄せ る、2児(4歳男児+1歳女児)、 弟、妻の兄弟2人、甥などこれ まで全部で8人を呼び寄せる
	MSR	無	共同生活	カリゴンジ		2004～	無	小学校校長→ドイツ (1991～1995)	
第 二 期	K	縫製業・物売り		ジャマルプール	Bの父の弟	2004～2012	2008まで	ギリシヤの田舎で農業 (政府による斡旋)4年、 終了後からアテネ	
	S	縫製工場経営	同居	ジャマルプール	Bの弟	2005～	無	インド→パキスタン→ヨ ルダン→トルコ→ギリシヤ	
	R	縫製業		ジャマルプール	Bの妻の兄	2006～2012	無	ドバイ建設業(2年)→イ ラン→トルコ→ギリシヤ	2012年にフランスに移動
	S	縫製業	共同生活	ブラフマンバリア	兄1991年～	2005～	無	パキスタン→イラン→ト ルコ→ギリシヤ	
	BH	レストラン	共同生活	ノルシンディ		2006～	無	バンガラで家具商売	
	H	イマーム	モスク			2008～	無	パキスタンで20年イマーム	

出典：2011年と2015年のアテネでの現地調査に基づき筆者作成

画祭で発表している⁶⁾。

4. ギリシャにおけるバン格拉デシュ出身労働者

ギリシャにおけるバン格拉デシュ出身労働者については [Kassimeris and Samouris 2012] および [Fouskas 2012] において詳細な調査がなされており、これらの文献から、筆者による限られた調査の裏付けを得たい。

2011年の調査当時、ギリシャは経済危機の真ただ中にあり、EU による経済制裁がとられていたのは周知である。多くの労働者が職を失うなかで、外国人労働者の状況もまた厳しいものであったことは容易に想像できる。それでも東欧系移民および南アジア系労働移民は未だ多い。査証をもたないという意味での不法滞在者も多いことから統計上の正確な数字は明らかでないが、在ギリシャバン格拉デシュ人協会会長の話によれば、2011年当時ギリシャに滞在していたバン格拉デシュ人は約3万人であった。[Kassimeris and Samouris 2012: 176] によれば、2007年のギリシャ在住のパキスタン出身の合法移民は5万人、バン格拉デシュ移民は12,000人で、その9割がアテネやアッティカ周辺で暮らしている。EU 圏内に住むバン格拉デシュ人の数は、イギリス、イタリアに次いで、ギリシャが多いという。

ギリシャに南アジア系移民が増えだしたのは1990年代初頭のことである。ギリシャ在住のムスリム移民の最多数はパキスタン人であり、バン格拉デシュ人がそれに続き、パキスタン人とバン格拉デシュ人を合わせるとムスリム移民の半数以上を占める [前掲: 175]。ギリシャでは、この南アジア系移民と合わせて、冷戦終結後の1990年代始めにアルバニアやブルガリアなど東欧系の移民がやってきて、一気に移民問題が課題となった。それでも1990年代半ばから2000年初頭のギリシャの好景気が移民の人びとを結果的にギリシャに留まらせた [前掲: 176]。EU のなかでは比較的労働力の安価なギリシャは、EU 域内貿易の製造品輸出国の役割を果たし、縫製業等の製造工場では南アジア系移民が多く働いていた。1990年代にギリシャにきたバン格拉デシュ出身者の話によれば、当初はパキスタン人が経営する縫製工場で働いていたという者が多い。またB氏をはじめ多くの者は、パキスタンで数年間働いた後にギリシャに来了という。ギリシャは2004年に開催されたアテネ五輪の頃に境にその後経済が低迷したが、それまでの好景気においては海外からの移民労働者に非常に寛容であった。陸路でたどり着いた多くの移民労働者は査証をもたない不法状態であったが、筆者の聞き取り調査の限りでは、1998年のギリシャ政府による不法滞在者への滞在許可証の発行の際に査証を取得した者が多い。その後、2001年と2005年にも同様に許可証が発行されている。この1990年代のギリシャ好景気のなか出稼ぎに来了者たちを便宜上「第1期」出稼ぎ者として、後で述べる第2期と分けることにしたい (表1参照)。

6) 国内では、日本文化人類学会第47回研究大会 (2013年6月、慶應義塾大学) と、日本南アジア学会第26回全国大会 (2013年10月、広島大学) において発表した。海外では、第13回ダッカ国際映画祭 (2014年1月、バン格拉デシュ) と、第5回アテネ民族誌映画祭 (2014年11月、ギリシャ) において上映した。

第1期の出稼ぎ者の事例としてB氏の経緯を述べてみたい。ジャマルプール県R村出身のB氏は1971年生まれで、7人きょうだいの長子である。9年生まで勉強したあと海外に出たという。最初はパキスタンに渡り、パキスタン人のもと縫製工場で2-3年働いた。その後、陸路でヨルダンやトルコを経て1992年ごろギリシャにたどり着いた。ギリシャは地理的にもまた入り易さからも、陸路を介したEU圏への入り口に位置付けられている⁷⁾。Fouskasの調査においても、バングラデシュ移民たちにとって、「トルコから最も近く、イタリアやスペインに行きたいがそこから先の手がない。あるいは先に来ていた同胞や親族を頼って」というのがギリシャにきた理由であるという[Fouskas 2012: 62]。B氏は、最初はパキスタン労働移民が経営する縫製工場を転々とし、その後ギリシャ人との共同経営での縫製工場を経て、2000年前後に独自経営に踏み出した。工場ではバングラデシュからの出稼ぎ者を雇い、最繁期には100人近い労働者を抱えていた。

縫製業に従事するバングラデシュ移民は珍しくなく、2011年調査当時アテネにある縫製工場の大半がバングラデシュ移民による経営であった。在ギリシャバングラデシュ人協会会長の話では、2011年の時点でバングラデシュ移民が経営する縫製工場は約200あるという。B氏がパキスタン移民が経営する縫製工場で働いていたように、1990年代はパキスタン移民による工場が大半であったが、不況後はバングラデシュ移民による工場の方が多くなったという。また、ギリシャにたどり着く過程で、パキスタンやトルコで縫製技術を習得したバングラデシュ移民も少なくない[前掲: 62]。

B氏は1998年にギリシャでの滞在許可を得て、2000年に出国後初めての帰省を果たす。筆者はちょうどその頃にB氏の出身地であるバングラデシュR村周辺で長期フィールドワークに入っており、B氏の帰省に遭遇した。当時は村に電話はなかったのでB氏の帰省は突然であった。約1カ月間の帰省で、その間にB氏は実家の家屋の建て直しを計画した。それまでトタン張の2、3部屋の家屋に両親と伯母夫婦、6人のきょうだいがひしめき合って暮らしていたが、B氏の帰省後約1年で7部屋あるレンガ造りの当時村一番の大きな家に建て替えられた。

2000年の帰国後、B氏の母親はB氏の結婚相手を探し、2002年夏に隣町の女性と結婚した。結婚の際、B氏は仕事のために帰省できず、当時普及しだして間なしであった携帯電話によって結婚した⁸⁾。その後、2003年に妻をギリシャに呼び寄せて、2004年と2005年にギリシャで子どもを授かっている。2005年に後述する弟S氏と義兄をギリシャに呼び寄せるが、ギリシャの経済が傾き始めると工場を次第に縮小した。子どもの就学を機に2010年末に妻と子どもたちがバングラデシュに帰国、2011年夏にはB氏もギリシャの工場を弟S氏に任せてバングラデシュに引き上げた。

7) [Kassimeris and Samouris 2012: 176]によれば、アジア・アフリカからの移民にとってギリシャは西欧への「通過点」でしかなく、彼らは西欧諸国で暮らす、すでに移り住んでいる親族などによって確立されたコミュニティを目指していた。

8) B氏の「携帯(ケータイ)婚」については[南出 2006]を参照されたい。

同様の例は筆者がアテネで聞き取り調査を実施した際にも聞かれた。2011年の調査時に筆者が訪れた2つの縫製工場は、いずれも1990年代にギリシャにきた第1期バングラデシュ出稼ぎ者たちの経営であった。R氏はB氏の同業者かつ友人で、B氏同様、単身で出稼ぎにきたあと滞在許可を取得後一時帰国して出身地域の女性と結婚し、ギリシャに妻を呼び寄せて家族とともに暮らしている。R氏の場合は弟や義弟、叔父など8人の親戚をギリシャに呼び寄せている。A氏もやはり1998年に滞在許可を取得したが、A氏の場合はバングラデシュに帰省しておらず、結婚もしていない。

B氏やR氏に見られるように、自らがギリシャでの滞在許可を得て故郷との往来ができるようになると、多くのバングラデシュ移民は、弟や義弟をはじめ親戚を呼び寄せる。呼び寄せるには1人につき70万から100万BDT必要という。そうして2000年代半ば以降に第1期の兄らから呼び寄せられた出稼ぎ者たちを便宜上「第2期」として考えてみる。

第1期の出稼ぎ者たちに比べると、第2期の彼らは最初からギリシャを目指してやってくる。ギリシャまでの経路は第1期者たちとほとんど変わらず、陸路でヨルダンやトルコを経由してくるが、バングラデシュの出発地とギリシャの到着地を結ぶ仲介者がいて、彼らはそれに従ってくるだけでよい。また、ギリシャ到着直後は第1期の兄たちの世話になる。しかし、第1期と第2期では到着時のギリシャの経済状況に大差があり、好景気のなかでチャンスを得て、さらに滞在許可を取得した第1期とは異なり、第2期の弟たちは仕事を得ることも難しく、滞在許可も取得できないままとなる。筆者がインタビューを行った13人は、6人が1990年代にギリシャにきた第1期移民で、7人が2000年以降にきた第2期移民であった（表1参照）。B氏やS氏のネットワークから紹介を得たことも関係しているだろうが、第1期移民は、1990年にギリシャ人女性との婚姻ビザで移民してきた1名を除き、5人が1990年代前半にギリシャにやってきて1998年と2001年に滞在許可を得ている。そのうち4人が家族と同居しており、3人がギリシャ移住後に一時帰国や携帯電話を通じてバングラデシュ人女性と結婚してギリシャに呼び寄せて生活している。家族を呼び寄せる点は中東諸国への出稼ぎにはほとんど見られない。

一方、第2期移民たちがやってきた2000年代半ばからギリシャ経済は傾きだし、2005年以降は移民労働者を受け入れる意味での滞在許可の発行もしていない。彼らはしたがって不法滞在の状況が続き、一時帰国はもちろん、ギリシャの街中を堂々と歩きまわることもできずに生活している。

第2期の例として、弟S氏の経緯を紹介したい。前述のようにS氏はB氏の弟で、2005年にS氏の援助によってギリシャにきた。ギリシャへの出稼ぎを強く希望したのはS氏自身である。到着直後は兄B氏の縫製工場で約3年半働いていたが、その後兄と喧嘩して工場を辞め、約1ヶ月間路上で物売りをした。2ヶ月間の船掃除の仕事を経て、別の縫製工場で半年間働く。その後、兄と和解して再び兄の縫製工場での仕事に戻った。兄が家族とともにバングラデシュに帰国するにともない、工場を受け継いだ⁹⁾。S氏にはギリシャ渡航前に結婚を

約束した女性（母方従妹）がいて、渡航後に正式に結婚した。しかし一時帰国も呼び寄せることもできないために、女性は農村の実家で9年間S氏の帰りを待っていた。

S氏のように第1期の兄たちに呼び寄せてもらった者のほかに顕著に聞かれた例は、中東諸国への出稼ぎで貯めた資金を元にしてギリシャに來たケースである。ドバイなど中東での出稼ぎ先から直接渡ってきた者もいる。

既婚者が多い中東諸国への出稼ぎとは異なり、ギリシャにきているバングラデシュ労働移民には未婚の男性が多い。そのことは筆者の調査からだけでなく、Fouskas [2012: 58] においても指摘されている。Fouskas [前掲: 62-63] の調査事例から、ギリシャのバングラデシュ労働者の傾向を捉えてみたい。Fouskas の被調査者の大半が従事するのはインフォーマルに経営されている縫製工場で、アティキ、ペリステリなどアテネ中心部から少し離れた郊外に工場が集結しており、彼らの居住地もその近くにある。筆者がインタビューを行った被調査者の居住地域とも重なる。バングラデシュ移民が仕事を得るには同胞者からの紹介が唯一の方法である [前掲: 62]。雇用主には、バングラデシュ人のほか、ギリシャ人、ウクライナ人、アラブ人、シリア人も含まれる。最初は週5日（4～8時間／日）労働で500～800€で雇用されるが、次第に週6日、1日10～15時間労働になることもしばしばある。しかし時間超過労働分の給与はたいてい支払われない。また、ギリシャ移民局は、移民に滞在許可を発行するにあたって「社会保障スタンプ (Social Security Stamp)」の提示を求める。これは労働時間に応じて雇用主から発行されるものであるが、多くの雇用主はバングラデシュ労働者に対してこのスタンプを発行しない。しかし、バングラデシュ移民はたとえ条件が悪くても安定的に仕事を得るには同じ雇用者の下で働くことを好む。

また、不況のなか雇用が得られず路上で物売りをしている者も多い。彼らは花、ハンカチ、化粧品などを売ったり、チラシ配りをしている [前掲: 64-65]。彼らの仕事は大半がその場凌ぎで、経験の蓄積といった継続性に欠ける [前掲: 55]。

滞在許可を持たない第2期の出稼ぎ労働者に多く聞かれたのは「来るんじゃなかった」という後悔の念である。中東諸国での出稼ぎを経てギリシャにやってきた労働者たちも「中東のほうがよかった」という。中東では合法であるゆえに路上で警察を気にする必要もなく、定期的に一時帰国もできた。それでもギリシャに來たのは、ヨーロッパへのあこがれや、ギリシャのほうが中東よりも稼げるとの期待からであったという。そうした第2期の労働者たちの多くは筆者と話していると「あと1年働いて滞在許可も得られなければ帰国する」と話す。しかし、2011年にそう言っていた彼らの数人は、2014年に筆者が再訪した際も同じ状況で働き続けていた。

9) S氏は2014年11月に突然帰国し、査証を取得して4ヶ月後に再度ギリシャに渡った。

5. 海外出稼ぎの夢と葛藤

彼らを海外出稼ぎに駆り立てるものは何か。もちろん経済的必要性から彼らは「稼ぎに」行くのだが、そこには出自社会での「海外出稼ぎ」に対するイメージが関係している。

5-1. 国内都市出稼ぎと海外出稼ぎの違い

海外出稼ぎに対するイメージを捉えるために、都市と海外への出稼ぎの関係、および出稼ぎの階層性について、述べておきたい。

現状においては、バングラデシュ国内での都市への出稼ぎの大半はダッカ近郊に急増する縫製工場での工員としての労働である。ジャマルプール県の調査地からそうした都市縫製工場への出稼ぎが顕著に見られるようになったのは最近のことで、まさに筆者が追跡している「教育第一世代」が教育経験をもとに非農業志向をもつことと関連しているが、受け入れ側の縫製工場ではすでに1980年代から多くの若者たちによる農村からの出稼ぎが見られている。1994年に都市部縫製工場を調査を実施した村山〔1997〕は女性労働者に着目した観点であるが、当時のダッカの縫製工場で働く労働者男女700人を対象とした調査のなかで、全体の8割が30歳未満であり、「縫製工場の労働者の離職率が高く、その度に新規雇用による労働者の若返りが繰り返されている」と述べる〔村山1997：66〕。その状況は15年後でもほとんど変わらず、筆者がダッカ郊外の現地経営者による小規模工場（労働者約250人）と、外資系中規模工場（約500人）で実施した調査でも、平均年齢は男性24歳、女性23歳であった。とくに男性では未婚者の割合が高い。縫製工場での労働は長時間の重労働で、さらに少しでも多くの収入を得ようとすれば時間外労働が必要で、若年層に限られがちである。しかし国内製造業の大部分を占める縫製工場での労働が若年層に限られるとすれば、その大多数の労働者たちはその後どのような仕事に就くのか。都市で別の雇用を得る者、農村に戻ってインフォーマルセクターの仕事に従事する者、あるいは多少の土地があれば農業に従事する者も多い。

若者たちを国内の縫製業に留まらせないのは縫製業に対するイメージも関係している。首都ダッカ近郊の縫製工場への出稼ぎがこれだけ浸透すると徐々に変化も見られるが、しかし今でも縫製工場での労働とくに工員業に対する社会的認識は決して高くない。そこには低賃金重労働ということも関係しているが、しかし山形ら〔2011〕が指摘しているように、重労働という点を除けば、縫製業工員が得る給与はバングラデシュの水準からいえば決して低くはなく、小学校教員やソーシャルワーカーの給与と変わらないか上である。しかしイメージの問題には、工員の場合は学歴が給与差を生み出さず、小学校を卒業していない者でも就けることや、急増する縫製工場労働は売り手市場なので、いわばどのような家の出身者でも就けるといふ好条件も関係しているのではないかと推察される。

それに対して海外への出稼ぎは、まず支度金が必要であり、その支度金を用意できる家であることが条件となる。実際に海外で従事する労働は非熟練職が大半であり、アテネの例

が象徴的に示すように、海外での仕事は国内で得る仕事と内容的に大差はない。しかし「海外に出せる」という家族背景や、同じ仕事でも得る給与に有意な差があれば、海外出稼ぎは一つのステイタスをなすイメージを今のところ持っている。出稼ぎ世帯が資産を有するという認識については山本〔2009：87〕でも同様の指摘がなされている。ただし山本が指摘する、本人の教育歴も海外出稼ぎに有意に関係しているとの見解は、筆者のジャマルプール県農村部での調査からは見られない。おそらくは、山本らの調査がコミラ県という伝統的に多くの海外出稼ぎ者を輩出し、多方面への出稼ぎ者を有する地域であるのに対して、ジャマルプール県のように近年になってようやく中東諸国への出稼ぎ者が増えだした地域との違いであると思われる。

5-2. 海外出稼ぎ者のステイタス意識と現実との葛藤

アテネでの調査でインタビューに答えてくれた第1期移民のA氏は、海外で働くことがどんなに大変で、移動にいかにもリスクをとまうかを強調したうえで、筆者の「なぜリスクを冒してまで海外への出稼ぎを目指すのか」という質問に対して、次のような見解を示した。

今わたしが国に帰ったとするでしょ。お金を持って帰ってくるのをみて若者たちは自分もあんなふうに成功したいと思うんだよ。そんな年頃がある。18, 19歳の頃に、海外に行って仕事してお金を稼ぎたいと夢見るんだ。貧乏を望む者は誰もいない。誰でも外へ出て成功したいと思うんだ。

この発言には2つの意味がある。1つは、本稿冒頭でシボンが述べていたことにも重なる「成功の道は海外に出ること」という認識である。もう1つは、海外で働いている者たち自身の、村に帰れば若者たちから「羨望のまなざし」で見られるということへの自負である。そのことを端的に示すのが、S氏へのインタビューの中にある¹⁰⁾。

人は海外での生活は楽だと思っている。でも海外での生活は困難だらけ。ものすごく頑張らないといけない。バングラデシュならこの半分の苦労で、豊かに平穩に暮らせる。半分の苦労をすればいい人生が送れる。ここでの縫製業をバングラデシュでやっていれば、ずっとよかった。両親もきょうだいもみな一緒に仲良く暮らせていた。でも縫製の仕事をバングラデシュでやっていたならば、人から「なんだ縫製か」と言われて恥をかく。同じ縫製業でも海外でしていれば恥ずかしくない。問題ばかりだよ。外国がいいと言うけれど、国の人たちによく思われる、それだけ。

その敬意だけで他には何もない。得たのはそれだけ、故郷の人たちがよく思う。

つまり海外への出稼ぎは、海外で成功する（海外での快適な生活やステイタスを得る）ことではなく、海外で働くことで故郷でのステイタスや家族の快適な生活を得ることに目的がある。しかし、そのことを理解しながらも、アテネで働く若者たちは、厳しい経済状況や先の

10) 本インタビュー記録はそのまま映像作品に収めている。

見えない不安に葛藤を覚える。上記のS氏の語りは以下のように続いた。

（得たのは故郷の人たちがよく思うことだけで）他はない，それ以外は失ったものばかり。この年齢で必要なものは何も得ないままに人生が過ぎていく。過ぎた6年はもう取り戻せない。

この「失ったもの」にはS氏にとっては結婚生活も含まれていることが容易に推測される。

バングラデシュには従来から「家出の文化」があり，男性たちは年頃になると出自コミュニティを離れて都市に出て，そこで数年間働き，20代半ばごろになると村に帰って結婚して家族を築くという習慣が見られた〔原 1986：337-338〕。海外への出稼ぎには多額の支度金を要するため勝手に出ていくことはできず，また経済的動機が先行するが，「成功への夢」や「村人からの羨望」といった動機は若者期に特徴的なものと思われる。とくに未婚若年層が多いヨーロッパへの出稼ぎには「ヨーロッパへの憧れ」や給与水準の高さによる「一攫千金」といった，若者期に抱く「夢」が関係しているものと思われる。しかし非合法ゆえ，また実際には経済的な貯蓄が十分できないために故郷に帰ることができない「葛藤」が付きまとう。

一方，送り出す側の家族は，出稼ぎ当事者個人の「夢」以上に具体的な期待は大きい。第1期と第2期の大きな違いのもう1つは，バングラデシュ農村社会における携帯電話の普及にある。兄B氏が2000年に10年ぶりに一時帰国を果たしたとき，家族はB氏のことをほとんど確認できずにいた。しかしそれ以後は携帯電話が一気に普及して，頻繁に仕送りの催促をするようになった。弟S氏にいたっては，渡航直後から双方が毎日のように携帯電話で連絡をとっていた。村の送金受取システムもどんどんと便利になっている。海外への出稼ぎは家族にとって「待つ」ものから「働きかける」ものになった。

また，海外への出稼ぎは「婚資」にもなる。当事者不在の「携帯婚」が成立するように，海外に出稼ぎに出ていることは女性側へのアピールになる。それは女性にとって，婚家の経済状況を示すだけでなく，海外出稼ぎ者と結婚することで，自分の兄弟にも海外出稼ぎのチャンスがもたらされることを意味する。B氏やR氏が義兄や義弟を呼び寄せるのは，そうした妻からの要求である。

5-3. 埋まらない夢と葛藤のギャップ

故郷での海外出稼ぎに対するイメージと出稼ぎ先の実情にギャップがありながらも，海外出稼ぎは減るどころか増加傾向にある。このギャップを人びとはどのように理解しているのだろうか。ある面で，双方は「了解済み」なのである。前述のように筆者はアテネでの調査時にビデオ撮影をして，それをB氏とS氏の実家で上映した。上記S氏のインタビューや縫製工場での労働，また路上で物売りをしている出稼ぎ者の姿や葛藤のインタビューを農村の家族がどう見るかを捉えようとしたところ，上映後の反応は意外にも「海外での出稼ぎとはそういうものだ」との反応であった。「苦勞して当然，それでも海外に出られるのは恵まれ

ている」という。また出稼ぎ者本人も、出稼ぎ先では「来るんじゃないかった」といいながら、いざ帰国すると弟を呼び寄せることに積極的になるなど¹¹⁾、苦悩や葛藤によって出稼ぎが下火になる気配はない。

また、2011年にギリシャを引き上げて帰国したB氏は、その後、国内でビジネスを始めるためにさまざまに模索しているが、20年の不在は大きく、その間のバングラデシュの変化やネットワークの欠如から、国内ビジネスに繋げるのは決して容易ではない。

さらにアテネでA氏は、海外だからこそ働けるという点について以下のように語った。

国にいれば朝起きたら母親が食事を用意してくれている。何も心配しなくていい。ここ（海外）だと3日間働かなければ仕事はなくなるし、15日もすれば家から追い出される。

5人での共同生活では家賃が払えなければ誰も食べさせてくれないよ。懐にはタバコもお金も何も残らない。そのときどうするか。だから朝6時に起きて仕事に行かなければならないんだ。外国に住む者たちは仕事なしでは生きていけないんだ。

こうしたプレッシャーが労働へと駆り立て、そして故郷にできるだけ仕送りをすることが、彼らにとって家族の期待を満たし、羨望のまなざしを得るのにつながる。逆に言えば、「海外では苦労しながら働くが故郷に帰ると働かない」という極端な差が生じている。三宅[2003:203]によれば「帰国後自国での給与水準の低さから、仕事をする気が起こらず、貯金がなくなれば再度海外に働きに出るといった安易な考えに陥っている者も少なくない」という。極端な差には確かに給与水準の差も関係しているだろう。

このように、海外出稼ぎがバングラデシュの農村に浸透するにつれて、海外出稼ぎは「成功の道」のみでなく、出稼ぎこそが労働であり、出稼ぎ者を抱える家庭では労働と生活拠点が空間的に切り離されるといった状況が生じている。

6. お わ り に

以上、本稿では、バングラデシュ農村から海外に出稼ぎに出る者たちの夢と葛藤について検討した。事例がギリシャという特殊な状況下であることによる特異性は否めないが、出稼ぎ先での苦悩や葛藤と、送り出し社会における海外出稼ぎという夢は、他の出稼ぎ先にもある程度は共通する。彼らが出稼ぎ先で直面する問題にどう対応しているのかについては本稿で述べなかったが、[Kassimeris and Samouris 2012]や[Fouskas 2012]では、ギリシャのバングラデシュ移民コミュニティにおける相互扶助組織としての宗教施設（モスク）や移民労働者組合（Bangladeshi Immigrant Workers' Union of Greece: BIWUG）が注目されている。本稿が試みたのは、そうした葛藤や問題を含めて、海外出稼ぎがバングラデシュの農村と、実際に働きに出た先で、当事者たちにどのように捉えられているのかを明らかにすることにあった。現状では海外出稼ぎが農村社会におけるステイタスを成している。そのことが出稼ぎ当

11) S氏は2014年に帰国すると末弟を送り出すことを検討していた。

事者にはプライドとなり、海外での辛い労働にも耐える動機となっている。出稼ぎによる仕送りで建て替えられる家屋や購入される土地が経済的成功を物語り、さらには本稿で捉えた第1期移民たちのように、新たな出稼ぎ者を呼び寄せ、出稼ぎ文化を浸透させている。

さらに、ギリシャの事例は出稼ぎ先のイメージの階層性も示していた。中東諸国よりもヨーロッパの方が経済状況がよいとされ、中東では見られないがギリシャでは第1期移住者の多くが家族を呼び寄せる。しかし、ギリシャの選択には非合法的な道であるがゆえの困難も多いことは、ギリシャで帰るに帰られない若者たちの葛藤が物語っている。しかし、送り出し社会の農村においては出稼ぎのルートが合法的なものか非合法的なルートなのかという点があり重視されていないのが問題である。

バングラデシュ農村から海外への出稼ぎをめぐる彼らの「生活」とアイデンティティは、海外の出稼ぎ先ではなく、明らかに農村社会で築かれている。つまり、彼らの「成功」を証明するのは、自らがいかに快適な生活を得るかではなく、村のなかで自分や家族がどのように見られるかに掛かっているのではないか。村というコミュニティのなかの体裁にしばられるなかで、村からは不可視な海外での労働状況はそれほど問題ではなく、むしろ、村のなかでの海外出稼ぎがもつステータスや、稼いだお金で家屋が建つこと（たとえ自分がそこに住まなくとも）が、彼らの認識にとって重要なのである。この出稼ぎ文化がどうなっていくかは、今後のバングラデシュの国内経済の変化に寄っていることは言うまでもない。

謝辞

本稿に関する調査研究は、平成24年度～平成25年度科学研究費助成事業若手研究(B)「現代バングラデシュの『教育第一世代』による『青年期の創出』と社会変容」および、桃山学院大学2014年度研修制度(海外A)、2015年度特定個人研究費「バングラデシュ経済成長下における若者の「移動」と文化形成」によって実施できた。感謝を持って記したい。

参 考 文 献

- Abrar, C. R. and Janet Seeley eds., 2009, *Social Protection and Livelihood: Marginalised Migrant Workers of India and Bangladesh*, Dhaka: The University Press Limited.
- Bangladesh Bureau of Statistics (BBS), 2011, *Statistical Yearbook of Bangladesh 2010*, Dhaka: Government of the People's Republic of Bangladesh.
- Bureau of Manpower, Employment, and Training (BMET) <http://www.bmet.gov.bd/BMET/index>
- The Daily Star, 2015, dated February 10, "Saudi jobs up for gentle workers," pp. 1-2.
- Fouskas, Theodoros, 2012, "Low-Status Work and Decollectivization: The Case of Bangladeshis in Athens," *Journal of Immigrant & Refugee Studies*, 10, pp. 54-73, DOI: 10.1080/15562948.2012.646230
- Gardner, Katy, 2008, "Migration and the life course: some cases from Bangladesh," *Nribigyan Patrika* (Journal of the Department of Anthropology), Dhaka: Jahangirnagar University, 13, pp. 183-208.
- 原忠彦, 1986, 「イスラーム教徒社会の子ども」, 小林登他(編)『新しい子ども学3 子どもとは』, 海鳴社, 311-368頁。
- 池田恵子, 1993, 「出稼ぎ労働者の出身地域と出身階層」長谷安朗, 三宅博之(編)『バングラデシュの

- 海外出稼ぎ労働者』, 明石書店, 163-184頁。
- Kassimeris, George and Antonis Samouris, 2012, "Examining Islamic Associations of Pakistani and Bangladeshi Immigrants in Greece," *Religion, State & Society*, 40-2, pp. 174-191.
- Minamide, Kazuyo, 2005, "Children Going to Schools: School-Choice in a Bangladeshi Village," *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies*, 17, pp. 174-200.
- 南出和余, 2006, 「バングラデシュのケータイ婚」, 『月刊みんぱく 特集: ケータイ』, 30-7, 6 頁。
- 南出和余, 2012, 「海外へ, 都市へ—バングラデシュ農村からの出稼ぎ家族—」, 京都大学地域研究統合情報センター (編) 『地域から読む現代』, 京都新聞社, 98-101頁。
- 村山真弓, 1997, 「女性の就労と社会関係—バングラデシュ縫製労働者実態調査から—」, 押川文子 (編) 『南アジアの社会変容と女性』, アジア経済研究所, 45-81頁。
- 三宅博之, 1993, 「バングラデシュの海外出稼ぎ政策」, 『バングラデシュの海外出稼ぎ労働者』, 107-142頁。
- 三宅博之, 2009, 「豊かな生活を求めて—海外出稼ぎ労働者—」, 大橋正明, 村山真弓 (編著) 『バングラデシュを知るための60章』, 明石書店, 215-220頁。
- 高田峰夫, 2010, 「バンコクのバングラデシュ人社会についての予備的考察—タイ社会の変化とグローバル化の中で—」, 『広島修大論集』, 51-1, 171-195頁。
- 山形辰史 (編著), 2011, 『グローバル競争に打ち勝つ低所得国—新時代の輸出指向開発戦略—』, アジア経済研究所。
- 山本真弓, 荒木一視, 2009, 「バングラデシュにおける人口移動と社会階層—農村部から日本への出稼ぎ労働者を中心に—」, 『山口大學文學會志』, 59, 75-95頁。
- Zamir, Zahid, 2006, *Migrant Workers' Contributions in Malaysian Economy*, Dhaka: Cosmic Publishers.

(2017年3月31日受理)

Discourse and Reality of Overseas Life of Bangladeshi Migrant Workers: Between Greece and Rural Bangladesh

MINAMIDE Kazuyo

This paper describes the perception and reality of overseas life of Bangladeshi migrant workers from the perspective of both the workers themselves and their Bangladeshi rural village. This case study was conducted in one of the villages in Jamalpur, a central northern district in Bangladesh, and in Athens, Greece, one of the migrant destinations for Bangladeshi youth from the village. The actual situation of being an overseas worker in Greece is very different from what they imagined in Bangladesh. In addition, because of the economic crisis in Europe, they are no longer eligible for a residence permit in Greece and are forced to stay as an illegal migrant. However, they recognize that overseas work, especially in Europe, shapes their social status in their home village, and that they rely on that status to build self-esteem. It could be said that they depend on their social status in Bangladeshi rural society even while they work abroad. This paper depicts the gap between the perception of overseas work in Bangladeshi rural society and reality in Greece, from the context of their “dreams” and “struggles.”